

宮沢賢治「沼森」の背景

— 大正五年七月の地質調査 —

鈴木健司

初期短篇綴「沼森」に、石ヶ森、大森、沼森という三つの山の名が見られる。

石ヶ森の方は硬くて瘠せて灰色の骨を露はし大森は黒く松をこめぜいたくさうに肥ってゐるが実はどっちも石英安山岩だ。

沼森がすぐ前に立ってゐる。やっぱりこれも岩頸だ。どうせ石英安山岩、いやに響くなこいつめは。いやにカンカン云ひやがる。とにかくこれは石ヶ森とは血統が非常に近いものなのだ。

石ヶ森、大森、沼森は、盛岡の北西部滝沢市にある山で、岩手山の南東麓に位置する。ただ、鞍掛山がそうであるように、これらの山々も岩手山の側火山ではなく、

岩手山とは異なる起源のマグマから形成されたもので、宮沢賢治はすでにそのことに気づいていた。

明治期に実施されたナウマンによる大規模な地質調査（四〇万分の一「大日本予察地質図東北部」農商務省、一八八六）などでは、大まかな把握としては正しいと言えても、このような小さな山々の成因はなかなか究明されることがない。現在に至っても各種地質図間に少なからず混乱が見られ、宮沢賢治が行ったような地域を限定した小規模な地質調査は、意外にも、その正しさが次第に証明されつつあるといつてよい。

初期短篇綴「沼森」の成立の背景には、大正五年七月、宮沢賢治が盛岡高等農林学校二学年の夏休みに、盛岡付近を対象に実施された地質調査の体験が存在している。二年生一二名が四班に分かれ調査にあたり、賢治はB班に所属し細山田良行、小菅健吉らと盛岡の北西部（厨川

村・滝沢村)を担当した。その成果は『盛岡附近地質調査報文』「盛岡附近地質図」として、「校友会々報」第33号(大正六年三月一日)に掲載された。

賢治の担当した北西部(滝沢村)にあるのが、石ヶ森、大森、沼森の山々である。作品「沼森」を読む限りでは、一日の行程と推定されるが、調査は石ヶ森、沼森周辺だけではないので、調査範囲の全体を見た場合、何日をおけた調査だったのか、詳しいことは分かっていない。

賢治の短歌を見ると、大正五年七月のところに湯船沢、石ヶ森、沼森、新網張、大沢坂峠などの地名が見え、地質調査のポイントの移動に合わせて歌作した様子が窺われる。

推定される地質調査の行程だが、私は最初、賢治はまず石ヶ森に登り、そこから尾根伝いに沼森平の方に向かっていたのではないかと考えた。「石ヶ森」歌稿336の次に置かれている短歌が「沼森」歌稿337・338だからである。たしかに、その方が体力的な消費が少なくてすみ、大森には尾根伝いで沼森平側に移動し、そのち山頂(三角点)に向かうことが可能である。

しかし、この推定には難点がある。一つ目は、大森の岩石サンプルの採取に関する点で、岩石の適切な露頭が見当たらないのである。沼森平から見た場合、大森山頂

との高低差は二〇メートル程度で、山の体を成していない。賢治はどこで大森の岩石のサンプルを採取したのだろうか。

一般に千メートル以下の山の場合、山頂まで草木が生い茂り、足元は腐植質の層に覆われ、岩石を見出すことのできないことが多い。個人的経験から言えば、岩石の露頭を探すことはなかなか大変な仕事である。沢が見つかれば、たとえばそれが美しくない枯れ沢であったとしても、私は喜びの声を上げるだろう。崖もなく、沢筋も見つけられない場合、付近の腐植質の土を掘り返し、石の塊を見つけ出すのだが、その石が、本来のその山の石なのか判断することは簡単ではない。大森の場合はこちらに難しい。というのも、岩手山の山体が崩れて流れてきている可能性が否定できないからだ。作品「沼森」の舞台となっている場所は姥屋敷地区の一部で、小岩井岩屑なだれ堆積物(土井宣夫「岩手山の地質」岩手県滝沢村教育委員会、一九九九)が大量に流れ込み、姥屋敷一帯を覆い尽くしている。大森では結局、土中の転石を採取することになってしまったので、避けたいところだ。

もう一点は、作品「沼森」冒頭の表現の問題である。「石ヶ森の方は硬くて瘠せて灰色の骨を露はし大森は黒く松をこめせいたくさうに肥ってゐるが実はどっちも

石英安山岩だ^{デサイト}」。この一行も厄介な問題を含んでいる。賢治は石ヶ森と大森を同時に見ることのできる位置に立っているように読めるのだが、それにふさわしい場所を見つけようとしたがそれができないのである。賢治の視点が沼森平に据えられているとした場合、冒頭一行のような表現の生まれることはない。なぜなら、沼森平は高みに形成された台地で、台地の平に立つ人間の視線から、その台地を支える存在としての大森を見ることができず、石ヶ森も台地のへりからようやく見えるだけの存在だからだ。

作品「沼森」における地理関係を合理的に解釈しようとするなら、私は、自分の推定した賢治の調査行程を見直さなければならぬことになる。別なルートとなると、賢治は石ヶ森山頂まで登り岩石を採取し、その後、尾根伝いに進まず（つまり沼森平に向かわず）、山頂から西南の方向に延びる登山道を下り、谷底近くまで下り、あらためて大森に登ったという行程である。これは時間と体力を消費する行程なので、そのような行程を是とする合理的根拠を、私は長い間考えつくことができなかった。しかし、亀井茂・照井一明共著『宮澤賢治 岩手山麓を歩く 盛岡附近地質調査』（イーハトーヴ団栗企画、二〇一二・四）を読むに至り、私は自説を改める気持ち

に傾いた。もし賢治が大森の麓から長い距離を歩き山頂に立ったとするなら、そこでの岩石の採取は大森の山体からと言いついて得るだろう。これで一点目の問題は解決できたようだ。

さらに亀井・照井氏らの調査は、二点目の問題をも解決してくれていた。石ヶ森と大森の両山が一度に眺められる地点が紹介されているのである。平蔵沢を挟んで右手に石ヶ森、左手に大森が見える（図1）。この角度から見た両山は、作品「沼森」冒頭の表現と重なるように思う。石ヶ森の「瘠せて灰色の骨」（露出した岩石）が当時見えただかどうかは分からない。現在では全く見ることができない。岩石の露出しているあたりの木々がまばらになっていることが確認できるのみだ。賢治はこの地点に立つ前に石ヶ森の岩の露出した山頂に立っていたのだから、作品「沼森」執筆時にその記憶が生かされることは想定し得ることかもしれない。大森が「黒く松をこめざいたくさうに



図1 右：石ヶ森 左：大森

肥ってゐる」のは現在も同じである。おそらく、賢治はここに立ったのであろう。

私が、亀井・照井氏らの検証に価値を認めるのは、実は「滝沢石」の発見の問題も大きい。作品「沼森」から少し離れることになるが、賢治の調査行程を推定する上で、「滝沢石」の存在を切り離して考えることはできない。賢治らが執筆した『盛岡附近地質調査報文』（以下『報文』と略す）の中の「第三紀層」における「流紋岩質凝灰岩」には、次のような記述がある。

稍脆弱にして触るれば粗ヒゲの感を生じ灰白色にして灰状の外観を有し実質中に細き石英の粒子を散布す図幅の西北鬼越山以北に稍広く分布し金沢、影添坂で好露出を見る、多くは流紋岩の碎屑を混濁し又往々珪板岩粘板岩の碎片を雜ゆ、本岩中に散布せる石英粒の大部分が錐形式の結晶より成れるは特に注意すべきの価値ある所とす、採掘して竈材として賞用せらる（滝沢石）

「滝沢石」とはどのような石なのか、「流紋岩質凝灰岩」に分類されていることからおおよそのイメージは掴めるが、サンプルを採取することはできていなかった。

かつて私はこの「滝沢石」を探すべく、『報文』に記された金沢地区を調査したことがあった。素人の調査なのですぐに挫折したが、「金沢、影添坂で好露出を見る」のうち、金沢は現在にも残されている地名であるのに対し、影添坂は現在の地図には載っておらず、手がかりは切れていた。

ところが、亀井・照井氏が、大正時代の五万分の一地形図に影添坂の名の存在するところを見出し、実際に影添坂を確認し、同時に「滝沢石」の露頭も発見したのである。私もその場所を訪ねたが、山道の多くは現在ほあまり使われなくなっていることもあり、影添坂の名は地元の人々の記憶からも消え去っていた。幸い、子供のころ姥屋敷に住んでいたという七十代の女性から、五十年以上も前の記憶として、沼森平から歩いて山道を下りてきたというお話を伺うことができ、それが影添坂であるらしいことも分かり、案内していただき、ようやくにして影添坂の登り口を探し当てることのできた（図2）。

そして驚くことに、そこそが石ヶ森と大森の両山が一度に眺められる地点でもあったのである。この地点の真後ろに影添坂の登り口があり、その道は、大森の左を大きく巡り、沼森平まで続いている。影添坂を少し登り、そこに「滝沢石」と『報文』に記された石英結晶を含む

流紋岩質凝灰岩(図3)の地層を確認することもできた。大森へと続く影添坂と「滝沢石」が重なったとき、賢治の調査行程が影添坂を経て大森に向かったのではないという気持ちだが、私の中に確信のように湧いてきたのである。むろん、この発想は亀井・照井氏がすでに著書の中で記していることである。流紋岩は長石や雲母成分が風化作用を受け粘土質となることが多く、「竈材として賞用せらる」とはその意味であろう。

滝沢付近の岩石は「盛岡附近地質図」では、「新火山岩」と分類される石ヶ森、鬼古里山などの石英安山岩と、第三紀の「水成岩」と分類される燧堀山、高峰山などの「火山屑」に大別される。「火山屑」は安山岩質のもので、海底噴火のため破碎され、その隙間に玉髓などの形成されていることが多く、「新火山岩」との区別は容易である。「滝沢石」は「新火山岩」とも「火山屑」とも異なるもので、「盛岡附近地質図」には記載されていない。ただ「流紋岩質凝灰岩」ということから考えるならば、おそらく海底で堆積したものと思われ、『報文』では「第三紀層」として扱われている箇所該当するだろう。亀井・照井氏は「志和層と呼ばれる凝灰岩に似ている」と述べている。「志和層」は第三紀鮮新統に分類される地層で、大森のマグマは「志和層」に似た「流紋岩質凝

灰岩」の「滝沢石」(地層)を貫いて噴出したものということになる。「滝沢石は大森を構成する安山岩質の火砕岩に直接覆われ、さらにその上に大森の安山岩が重なる」という亀井・照井氏の観察報告はきわめて貴重である。



図2 影添坂(入口附近)

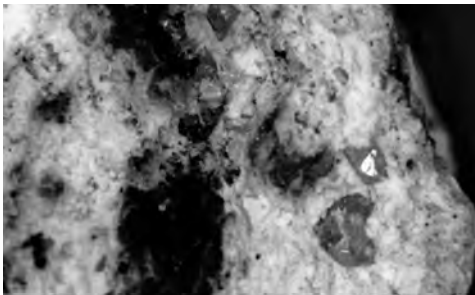


図3 石英結晶を含んだ流紋岩質凝灰岩(拡大)

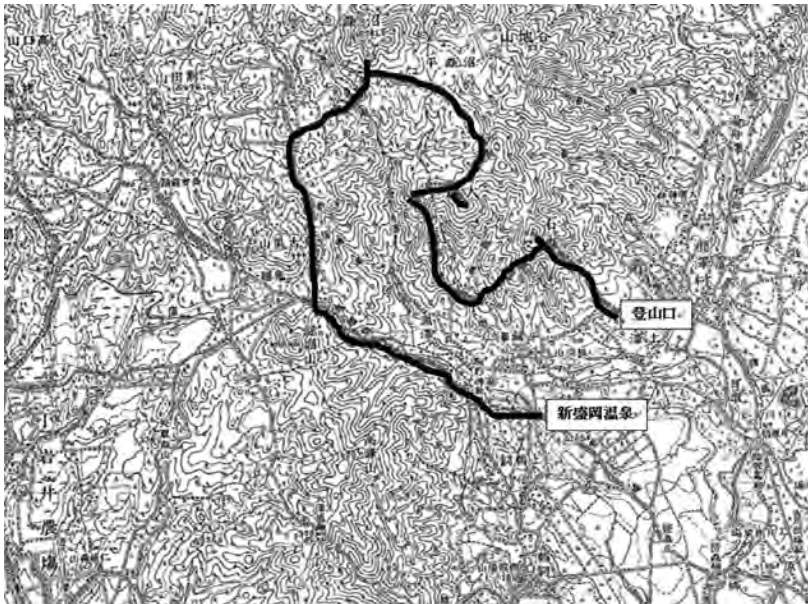
これで往路はほぼ納得のいく推定ができた。帰路に関してだが、亀井・照井氏は「おそらく鬼越坂より影添坂を下り」と推定しているが、「鬼越坂より」が「鬼越坂から」の意味であるなら地理的な混乱があるように思う。鬼越坂から影添坂に戻ることはかなりの遠回りになる。

「沼森」の本文は次のようになっている。

沼森平といふものもなかなか広い草っ原だ。何でも早くまはって行って沼森のやつ脚にかゝりそれからぐるっと防火線沿ひ、帰って行って麓の引湯にぐったり今夜は寝てやるぞ。

「それからぐるっと防火線沿ひ」をそのまま読めば、やはり、来た道に戻った、すなわち影添坂に引き返したのではなく、鬼越坂を下ってきたのではないかと推定できるだろう。鬼越坂は影添坂より通り慣れた道のはずでもある。

次の地図に、賢治の「沼森」の行程を太線で書き込んだみた。



「沼森」の表現からは、沼森平に着いた頃は夕刻のようで、季節の夏であることを考えると時間がかかりすぎている。歌稿を参照すると、石ヶ森の直前に湯船沢の地名が見えるので、賢治はその日まず湯船沢の調査から始め、昼近くになってから石ヶ森に入った可能性も十分考えられる。

推定される調査の行程は、午前中に湯船沢を調査し、昼あたりから石ヶ森に登る。一度下山し、影添坂を経由し大森に至る。沼森平から道なり（防火線）に沼森に向かい岩石を採取、その後沼森の麓を左に折れ、沼の存在を確認し調査終了。すでに夕暮れ時になっていたようだ。沼の横をそのまま進み、鬼古里山の前を通り、燧掘山の裾をめぐる鬼越坂を下る。蒼前神社前を抜け、鶴飼細谷地にある新盛岡温泉に投宿。「麓の引湯にぐったり今夜は寝てやるぞ」の「引き湯」が新盛岡温泉であることは別稿で考察した。

（本学教授）